

平成22年度
No. 4
11月8日

全連小速報

全国連合小学校長会事務局
東京都港区西新橋1-22-14
電話 03-3501-9288
発行人 会長 向山 行雄
編集人 広報部長 高橋 武郎

『分科会の充実こそ 最大のおもてなし』

第62回全連小研究協議会北海道大会成功裡に終わる

平成22年9月30日(木)～10月1日(金)北海道立総合体育センター(きたえーる)及び周辺会場

鮮やかな四季と雄大な自然に象徴される北海道、世界自然遺産知床に代表される豊かな海や森林、湖沼が織りなす自然あふれる北海道において、9月30日(木)・10月1日(金)の2日間、第62回全国連合小学校長会研究協議会が全国から約3000名の参加者を得て、盛大に開催された。

本大会は、新しい主題のもとでスタートして3年目となる。1日目は、開会式・全体会の後、13の分科会・分散会に分かれて活発な協議が行われた。また、2日目には「ふるさと 夢と希望そして挑戦」を主題にしたシンポジウムが柿沼博彦氏、小菅正夫氏、植松努氏をシンポジストに迎え、有馬守一調査研究部長の進行で行われた。

閉会式では、「虹と雪のバラード」を合唱し、感動のうちに大会の幕を閉じた。

大会主題

新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる

日本人の育成を目指す小学校教育の推進

～ふるさとに誇りをもち、夢や希望に向けて挑戦する子どもの育成を目指す学校の在り方～

開会式

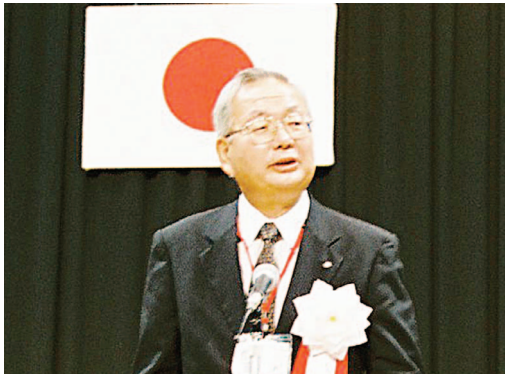
- 1 開会のことば 富田 大会副会長
- 2 国歌斉唱
- 3 あいさつ 向山行雄 大会会長
福田信一 大会実行委員長
- 4 祝辞 文部科学大臣 高木義明様
(代読 文部科学省大臣官房審議官 徳久治彦様)
北海道知事 高橋はるみ様
北海道教育委員会教育長 高橋教一様
札幌市副市長 生島典明様
- 5 来賓紹介
- 6 閉式

志を高く掲げ力強く前進する

向山行雄 大会会長

全連小の研究主題「新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進」は3年目になる。

教育内容を40年ぶりに増やす新教育課程の全面実施が目前に迫ってきた。各学校において着々と実践が進められていることと思う。新教育課程の「変わる部分」についての周知とともに「変わらぬ部分」についての再確認をしていただき、我が国の小学校教育のすばらしき伝統を更に発展させることができるように教職員を



リードしていただきたい。

本大会では、「ふるさとに誇りをもち、夢や希望に向けて挑戦する子どもの育成を目指す学校の在り方」を副主題にしている。次の時代を担う子どもたちに自分の育つ地域への愛着心を抱かせ、地域社会の一員としての資質をはぐくむことは、今日の重大な教育課題である。

さて、全連小は「志を高く掲げ力強く前進しよう」というスローガンを掲げて活動している。志とは夢であり希望であり目標である。「志を高く掲げる」とは、校長自身が学校づくりのビジョンを示し、実現の道筋を提示することである。道筋に課題があれば、それを解決する手立てを教職員にアドバイスすることである。

学校にとって厳しい時代が続いているが、校長が志を高く掲げ、理想の教育を追求していくことで、きっとその願いが周囲にも伝わり、学校が活性化していくはずである。ここ北海道に集まれた皆様が学校づくりについての成果と課題を語り合い、方策を得ていただき、明日からの学校運営に生かされることを願う。

全連小は、今後も小学校教育の充実のための定数改善をはじめ条件整備を活動の大きな柱の一つとして関係省庁や国会議員に対して要望していく。また、中教審をはじめ関係機関に引き続き意見表明をし、願いを伝えていく。

結びに、本大会の開催にあたり数年にわたって周知の準備を進めていただいた、北海道小学校長会の福田信一会長はじめ、北海道小学校長会の皆様にご敬意を表するとともに、心から感謝申し上げます。また、ご協力いただいた北海道、北海道教育委員会、札幌市、札幌市教育委員会

をはじめ、関係者の皆様に感謝申し上げます。本大会が会員の皆様のご協力を得て所期の目的を達成できることを祈念してあいさつとする。

ふるさと 夢と希望 そして挑戦

福田信一 大会実行委員長

本大会は、第53回北海道小学校長会教育研究札幌大会を兼ねての開催となるが、新しい時代の教育を創造するという志を高く掲げ、校長としての指導性や学校づくりのビジョンを共に語り合える実り多い大会にしたい。

北海道大会は「分科会の充実こそが最大のおもてなし」を合言葉に、これまで準備を進めてきた。「ふるさと、夢、希望、挑戦」をキーワードにグループ討議やICTを活用するなどの工夫をしたので、積極的に発言していただきたい。

教員免許更新制、教職員定数改善計画等の動きなど、これまでの学校のシステムが大きく変化している時代だからこそ、校長は社会の流れに決して目を背けることなく恐れず、ひるまず、いつも前向きに学校経営にあたることが求められる。そして、子どもたちの健やかな成長のためにという原点を見失うことなく、リーダーシップを発揮したい。

学校は新しい教育を創造する場であり、教師は新しい教育を創造する担い手であり、校長はそのリーダーであらねばならない。次年度から新教育課程が全面実施されるが、学校が果たすべき役割は、校長のリーダーシップにかかっているといても過言ではない。

大会二日目のシンポジウムでは、北海道を代表する三人の方にご登壇をお願いした。

デュアル・モード・ビークル（DMV）を開発したJR北海道柿沼博彦副社長、「行動展示」という画期的な方法で廃園の危機を救った旭山動物園小菅正夫前園長、純国産ロケットカムイを開発した植松電気植松努専務の三人である。

自分の夢や希望に向かって挑戦し続けることの意味や、マイナスをプラスに転じる方策や気概など、興味深いお話を伺えると期待している。

本大会を開催するにあたり、ご指導ご助言をいただいた関係の皆様にご心より感謝申し上げます。

高木文部科学大臣祝辞代読（要旨）

文部科学省大臣官房審議官 徳久治彦様

日頃から小学校教育の充実・発展のため、多大なるご尽力をいただいていることに深く敬意を表するとともに心より感謝申し上げます。

新学習指導要領の先行実施は、円滑に行われている。これもひとえに、教職員間での改訂趣旨の理解・共有や指導計画の作成、教材の準備などに、リーダーシップを発揮していただいた校長先生方のご尽力のたまものであり、心から感謝申し上げますとともに、来年度から始まる全面実施に向け、引き続きお取り組みくださるようお願い申し上げます。

今大会の成功と全国連合小学校長会のますますのご発展、ご出席の皆様のご活躍を祈念して、お祝いの言葉とする。

北海道知事祝辞（要旨）

北海道知事 高橋はるみ様

第62回全国連合小学校長会研究協議会北海道大会が盛大に開催されることを、心からお喜び申し上げます。

近年、グローバル化の進展や、人口減少・少子高齢化が急速に進行する中、学校教育を巡っては、子どもたちの生活習慣の乱れや、学力、体力の低下が問題視されるなど、様々な課題が指摘されている。こうした中、「知・徳・体」のバランスのとれた子どもたちの「生きる力」をより一層はぐくむために改正された学習指導要領が小学校では来年度から全面実施されることとなり、準備を進められていることと思う。

道としても、子どもたちが「生きる力」をはぐくみ、ともに支え合う共生の精神をもって、希望あふれる未来を築いていくことができるよう、今後もさまざまな教育環境の充実に取り組みで参りたい。

こうした中、「新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を大会主題に、研究協議されることは、誠に意義深い。

北海道は今、紅葉も色づき始めるなど、色鮮

やかな時季を迎えており、皆様には、この機会に北海道の魅力もお楽しみいただきたい。

北海道教育委員会教育長祝辞（要旨）

教育長 高橋教一様

校長会においては、学校経営上の諸課題の解決に向け、組織的に研究を積み重ねられ、我が国の小学校教育の充実・発展のため、多大な貢献をされていることに深く敬意を表する。

新しい学習指導要領の趣旨を踏まえた知・徳・体のバランスのとれた「生きる力」をはぐくむ教育課程の編成・実施はもとより、保護者や地域住民の理解と参画を得ながら、社会の要請や地域の負託に応える学校経営を推進することが求められている。

本道においては、「北海道教育推進計画」において、自立と共生を基本理念とし、「信頼される学校づくりの推進」を基本目標の一つに掲げ、地域の自然環境や人材などの教育資源を生かした魅力ある学校づくりを進めるとともに、教職員が子どもたちに正面から向き合いながら、一人一人の成長・発達を支えることができるよう、教職員の資質・能力の向上を図る教職員研修の充実に取り組んでいる。本研究協議会が「新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を大会テーマに掲げ、小学校の今日的な教育課題の解決に向けた具体的な方策等について、全国の優れた実践事例に基づき、研究協議を深められることは心強い限りであり、北海道から大きな成果を発信していただけるとご期待申し上げます。

上田札幌市長祝辞代読（要旨）

札幌市副市長 生島典明様

今日の子どもたちを取り巻く状況を見ると、児童虐待やいじめ、不登校などが生じ、大きな社会問題となっている。このような中、札幌市では、平成21年4月に「札幌市子どもの最善の利益を実現するための権利条例」を施行するなど、子どもが生き生きと過ごし、自立した社会性のある大人へと成長できる社会づくりに向け、全市的に取り組んでいる。

また、札幌市の学校教育においては、「札幌らしい特色ある学校教育」を推進し、すべての学校が、「雪」「環境」「読書」という3つのテーマに沿った取り組みを進めることなどにより、将来の札幌を支え、世界で活躍する自立した市民・社会人の育成を目指している。

中でも年間降雪量が6メートルを超える「雪」は、雪を克服したり、雪を楽しんだりする活動を通じて、冬を元気に過ごし、北国の子どもとしてたくましく成長していくための貴重な学習財産、札幌らしさの象徴というべきものである。

皆様には、この大会の成果をそれぞれの地域へ持ち帰り、地域の特色を生かした学校づくりに生かしていただきたい。

文部科学省講話（要旨）

文部科学省大臣官房審議官 徳久治彦様

昨今の国の教育行政をめぐる問題について、文科省行政説明資料をもとに説明する。

まず、平成22年度文科省予算のポイントについて説明する。政権交代があり、施策の重点が変わった。「コンクリートから人へ」の理念に立った教育予算に反映されている。

具体的にどう反映されているのかを説明する。過去30年で最高の伸び率となる5兆5926億円、前年度増3109億円、5.9%の伸び率を確保した。1つ目のポイントは、過去30年で最高の伸び率であること、2つ目は、他の省庁の予算が減る中で伸びたことである。

政務三役が、教育施策の順序を明確にしたので紹介する。3つのフェーズがある。第1は、教育費負担の軽減、教育費格差の是正である。高等学校授業料の無償化は、本年度より実行済み。第2は、教員の資質と数の充実である。教員や教材関係の充実については、平成23年度の予算に反映させた。第3は、ガバナンスの改革である。地方教育行政制度の位置付け、学校評議員制度など、学校の統治や運営システムについては、今後検討に入っていくことになるだろう。

次に、内容について話す。1点目は、新学習指導要領の円滑な実施に向けた指導体制の充実

である。子どもと向き合う時間の確保として、教職員定数の改善、4200人増を実施した。5倍以上の増加である。理数科の少人数指導や特別支援教育の充実、教員の事務負担の軽減等に充てた。退職教職員等の人材活用も行った。理科設備予算の拡充等で教材の整備を行ってきた。

2点目は、学習評価・指導要録の改訂についてである。5月に学習評価の在り方を改訂した。現行の学習評価を踏襲しながら、現場の意見をもとに負担軽減を図る形で改訂をした。評価の4観点は引き続き行うこととした。

教科書の検定が行われ、量・質ともに充実し、学びやすい教科書がそろった。

3点目は、教員の資質と数の充実である。数の充実だが、30年ぶりの見直しで、35人学級を実現する。（低学年は30人学級）しかし、来年4月から実施することが決まったわけではない。決意表明をしたということであり、財務省と詰めた上で国会に提出、3月末に国会の承認を得て成立する。30年ぶりの定数改善であることと、10年ぶりの教職員定数改善計画の策定であることがポイントである。定数改善計画案の内容だが、①少人数学級の推進②教職員配置の改善（5年で、4万人の配置を計画）③柔軟な学級編制のための制度改正である。その基になったのが、中教審の7月の提言である。実現のために、ぜひ現場の声を寄せてほしい。

次に、教員の資質・能力の総合的な向上方策についてである。中教審では、①新たな教員養成・免許制度の在り方について②教職生活全体を通じて教員の資質・能力の向上を保証する仕組みについての構築などを議論していく。免許更新制については効果の検証を踏まえ、どのように位置付けていくのか議論を生かしていく。免許更新制について抜本的な見直しに着手したが、法律改正が行われるまでは現行制度が有効である。受講されていない先生方には受講するように指導していただきたい。今年中に一定の方向性については示す予定である。具体的にはまだ時間がかかる。来年以降になるであろう。

全国的な学力調査は、今年度から抽出・希望制になった。平成23年度も引き続き抽出・希望

方式となる。平成24年度以降は、調査検討委員会を立ち上げ検討を続ける。

第1日 全体会

司会 杉本 貢 大会実行副委員長

- 1 本部報告
- 2 大会主題・研究課題趣旨説明
- 3 大会宣言に関する提案

本部報告（要旨）

露木昌仙 対策部長

始めに、文教施策並びに予算についての要望を説明する。教育費の増額、教職員の定数改善や人的措置などの条件整備、教職員の資質向上を図る施策、新学習指導要領の円滑な実施のための教材整備など8つの観点から40項目にわたる要望書を、文科省、財務省、総務省の関係各課を訪問し提出した。特に、財務省では厳しさを感じた。文科省の平成23年度概算要求及び要望については、文科省大臣審議官より話が合った通りである。今回の目玉は、義務教育費国庫負担金で、平成23年度から小学校1・2年生で35人学級を実現するための教職員定数の改善を図るものである。

先週、全速小事務局から教職員定数改善についてのパブリックコメントへの意見表明のお願いを各都道府県会長宛てに依頼した。政策コンテストに勝ち残り、計案案を実現させるためにも、全国の小学校から意見表明がなされるようお願いしたい。

三地区対策・調研担当連絡者協議会を10月14日東京、21日大阪、22日福岡で開催する。対策



部は、学校の緊急課題への対応のためのサポート体制の整備、新学習指導要領の確実な実施に向けた施設設備や教材の整備、人的措置の状況についての協議を行う。調査研究部は、「教育課程の編成・実施・評価・改善の状況」「新たな学習評価への対応状況や今後の学力調査の在り方に関する情報交換」を行い、来年度の要望に生かしていきたい。

また、本部報告を読んでいただくとともに、「速報」、「小学校時報」等で本部の状況を伝えているので参考にさせていただきたい。

大会主題・研究課題趣旨説明

藤川 隆 北海道大会研究部長

「少年よ、大志をいだけ」札幌農学校クラーク博士の言葉である。人としてなすべきことを示した博士の言葉は現在も脈々と生き続けている。地域に貢献しようとする意識や未来に向かって挑戦する心を子どもたちに育てることは校長の果たすべき役割でもある。北海道大会では、大会主題のもとに、副主題を「ふるさとに誇りをもち、夢や希望に向けて挑戦する子どもの育成を目指す学校の在り方」と設定している。

将来を自律的に生きるための生きる力を、子どもたちにとっての夢や希望という視点から再認識したいと考える。分科会・分散会では、新しい教育課題について学校経営の責任者でもある校長の指導性やビジョンについて、具体的な事例や実践をもとに協議を深めていただきたい。

<分科会・研究課題と研究の視点>

1 「校長の職責」

課題：創意と活力にあふれた学校づくりと校長の在り方

視点①：子どもの夢や希望の実現を目指す、創意あふれる学校経営の推進

視点②：地域とのかかわりを豊かにもち、明確なビジョンのもとで活力あふれる学校経営の推進

2 「組織・運営」

課題：組織の活性化を図り、活力ある学校運営を進める校長の在り方

視点①：教職員の意識改革に働きかける校内組織編成と、活力ある学校経営に生かす取り組みの推進

視点②：危機管理体制の確立を目指し、組織を活性化する学校運営の推進

3 「学校評価・人事評価」

課題：学校評価・人事評価を生かした学校づくりと校長の在り方

視点①：信頼される学校づくりを目指し、人事評価を生かした学校経営の推進

視点②：開かれた学校づくりを目指し、学校評価を生かした学校経営の推進

4 「教育課程Ⅰ」

課題：心の教育の充実を目指す教育課程の編成と校長の在り方

視点①：倫理観や規範意識等をはぐくむ教育課程の編成と実施及び評価、改善

視点②：道徳的実践力を高め、豊かな心の育成を目指す教育課程の編成と実施及び評価、改善

「教育課程Ⅱ」

課題：確かな学力の向上を目指す教育課程の編成と校長の在り方

視点①：基礎的・基本的な知識・技能の習得とともに、それらを活用できる教育課程の編成と実施及び評価、改善

視点②：子どもの個性や特性を生かし、学ぶ意欲を高める指導の組織化

5 「現職教育」

課題：教職員の人間性と専門性を高め、意識改革を促す現職教育と校長の在り方

視点①：教職員の意識改革を促し、資質や能力の向上を図る校内研修体制の構築

視点②：教職員の人間性と専門性を高め、指導力向上を目指す研修の充実

6 「生徒指導」

課題：深い児童理解で豊かな人間関係を築く生徒指導と校長の在り方

視点①：児童理解を深め、かかわり合う力の育成を目指した教育活動の充実

視点②：家庭・地域・関係機関等との連携の在り方

7 「人権教育」

課題：生命を尊重し、互いに豊かに生きることができると人権教育と校長の在り方

視点①：自他の人権を尊重し、自立と共生の心をはぐくむ教育の推進

視点②：人権意識を高め、実践力を培う人権教育の推進

8 「健康教育」

課題：たくましく生きる心と体をはぐくむ健康教育と校長の在り方

視点①：心身ともに健やかな成長を目指す健康教育の推進

視点②：望ましい食習慣の形成を目指す食育の充実

9 「環境教育」

課題：自然環境を大切にする心と実践力を育てる環境教育と校長の在り方

視点①：教科・領域との関連を図った環境教育の推進

視点②：多様な体験的な活動を通し、実践的態度の育成の充実

10 「家庭・地域・異校種等との連携」

課題：教育機能を生かす家庭・地域・異校種等との連携と校長の在り方

視点①：学校と家庭・地域等との連携を果たす学校の役割

視点②：幼保・小・中連携を生かした教育活動の推進

特別分科会「教育課題Ⅰ」

課題：情報教育・外国語活動

視点①：情報活用能力や情報モラルを高める教育活動の推進

視点②：豊かな表現力やコミュニケーション能力をはぐくむ外国語活動の推進

特別分科会「教育課題Ⅱ」

課題：キャリア教育・特別支援教育

視点①：職業観・勤労観をはぐくむキャリア教育の推進

視点②：子ども一人一人の教育的ニーズに応じた特別支援教育の推進



第2日 全体会

司会 杉本 貢 大会実行副委員長

1 研究協議のまとめ

2 大会宣言文決議

鈴木晶夫 大会宣言文起草委員長

◇ シンポジウム

研究協議のまとめ

前川 隆 北海道大会研究副部長

13の分科会・分散会において「学校経営の責任者としての校長の指導性」の観点から充実した研究協議がなされた。ミドルリーダーの育成、研修を通じた教職員の意識改革など、「校長としてのかかわり」を強く意識した事例等について交流し、地域を越えて共通理解を図ることができたことは、本大会の大きな成果である。

各分科会・分散会の具体的な内容について「ふるさと、夢、希望、挑戦」というキーワードにそって申し上げる。

まず、「教員の資質能力の向上」について、第1・第2・第5分科会では、組織体制の在り方を見直し活性化を図る観点からの報告があり、討議が行われた。第1・第3分科会では、「学校評価」「人事評価」などを校長が効果的に活用することの大切さが明らかになった。来年度から全面実施される新教育課程の編成・実施、評価・改善について発揮する校長の手腕こそが、教員の資質・能力の向上を図る上で重要であることも確認された。第6・第10分科会では、学校経営の活性化を意図して現状や課題を把握・分析し、具体的な方策を提示する校長の在り方などについて討議が行われ、その有効性が確認された。教職員定数改善に向けた動向を見据え、若手教員やミドルリーダーを育成する校長の役割の大切さも確認された。

校長の指導性が発揮されるためには、組織論や機能論の観点だけでなく、人的な要素、地域的な背景などを踏まえることも重要であり、それらが相互に働き合うことによって、学校改革が促進され、学校そのものが活性化される。学

校が活性化されることによって、子どもたちの夢や希望の実現が大きく後押しされるということが明らかになったことは、極めて大きな成果だったと言える。

次に、教育課程上の諸課題について、第9分科会では、郷土の自然の価値を子どもたちに再認識させる取組みを行うなど、ふるさとに誇りをもたせるために学校の特色の生かし方の工夫が明らかになった。第4・第6・第7・教育課題Ⅱ分科会では、規範意識、自尊感情、自己肯定感などを醸成する実践報告や一人一人の人権意識を高める体験活動の報告もあった。これらの規範意識、自尊感情、自己肯定感を育てることは、子ども一人一人に夢や希望をもたせることに直結する。校長が明確なビジョンをもつとともに、子どもや地域の実態を把握し、それに応じて効果的なアプローチの方法を教員に提示していくこと、あるいは客観的で具体的、かつ、新鮮度の高い情報の提供に努めることが大切であることも再確認された。

第8分科会・教育課題Ⅱでは、子どもが自分自身の健康や安全に興味をもち、将来の生き方を考えるための素地を養う体力の向上、食の指導、職場体験などの実践が報告され、討議を深めた。

第4分科会・教育課題Ⅰ・Ⅱでは、今日的な課題であるICT、外国語活動、特別支援教育について、子どもたちの変容を踏まえたかかわり方などを明らかにするための校長のリーダーシップの発揮の在り方が、具体的に解明された。

以上、「分科会・分散会の充実こそが最大のおもてなし」を合言葉に、グループ討議、ICTの活用、名刺交換、アナライズカードなど新しい方法を取り入れ、分科会討議の活性化につながったことを心からうれしく思う。

この北海道大会の成果が、ご参会の校長先生方の今後の学校経営に生かされ、新しい時代を拓く子どもたちの育成につながることを、そして来年の山形大会に引き継がれ、ますます大きな成果が得られることを確信し、北海道大会の研究協議のまとめとする。

大会宣言

全国連合小学校長会は、結成以来、我が国の小学校教育充実・発展のため、真摯に研究と実践を重ね、着実にその成果をあげてきた。

知識基盤社会化やグローバル化が進む中、改正教育基本法に基づき教育振興基本計画が策定され、平成21年4月からは学習指導要領の先行実施が始まった。本会では第60回香川大会から、大会主題「新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を設定し、研究と実践に組織をあげて取り組んできた。

現在、我が国は、先行き不透明な状況の中で少子高齢化が進み、消費停滞や雇用不安など低成長時代の中にある。このような情勢を背景に、地球環境に配慮した経済への効果的な対応や、歴史や伝統、文化の再評価など、「知」の創造・継承・発展を目指す持続可能な社会形成への要請が高まってきている。学校教育においては、自分の夢や希望の実現に向けて挑戦するたくましい子どもを育てるとともに、社会の一員としての自覚と責任をはぐくむことが求められる。

それを実現するためには、校長のリーダーシップのもと、基礎的・基本的な知識や技能の習得・活用を図るとともに、生活の場である地域社会において、自然体験や地域の歴史・文化、多様な人々とふれ合う体験的な活動を通して、互いに認め合い、支え合いながら共に社会に参画できる人間、自然と共生し、良好な環境を創造していく人間をはぐくむことが大切である。

私たち校長は、鋭い先見性と高い教育理念のもと、北海道大会における副主題「ふるさとに誇りをもち、夢や希望に向けて挑戦する子どもの育成を目指す学校の在り方」の解明に向けて全力を傾注し、国民の信託に応えなければならない。

ここに、第62回全国連合小学校長会研究協議会北海道大会の総意に基づき、次の決意を表明し、その実現を期する。

記

- 一、新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成
- 一、ふるさとに誇りをもち、夢や希望に向けて挑戦する子どもの育成
- 一、基礎的・基本的な知識・技能の習得と、思考力・判断力・表現力等の向上を図る創意ある教育課程の編成・実施・評価・改善
- 一、道徳教育を中核に据えた心の教育の一層の充実
- 一、学校の自主性・自律性の確立と家庭・地域社会の教育力の向上
- 一、安全で安心できる教育環境づくりと子どもの居場所づくりの推進
- 一、校長自らの研磨と、教職員の資質・能力の向上を図る現職教育の充実

右、宣言する。

平成22年10月1日

第62回全国連合小学校長会研究協議会北海道大会

シンポジウム

『ふるさと 夢と希望そして挑戦』

(要旨)

シンポジスト

旭山動物園前園長 小菅正夫氏
北海道旅客鉄道株式会社取締役副社長

株式会社植松電機専務取締役 柿沼博彦氏
植松 努氏

コーディネーター

全連小調査研究部長 有馬守一



有馬 御三方が、それぞれの分野でどのようにハンディを個性に変えていったのか、ご自身の夢や挑戦に火をつけたものは何か、私達校長、あるいはこれからの学校教育へ何を望むか、お一人ずつお話しいただきたい。

植松 僕のハンディは、北海道の小さな炭鉱の町に生まれたことだ。僕は、小さい頃宇宙が好きだった。北海道出身で日本人初の宇宙飛行士毛利さんに憧れ、僕もなれるかもしれないと思った。そして、紙飛行機の本、ペーパークラフトの本、いろいろな本に出会い、飛行機が大好きになった。



ところが、「無理だ。飛行機やロケットの勉強は大学に行かないと教えてもらえない。この町に生まれた段階で、無理だ。」と中学の進路の先生や周りの大人に言われた。でも、僕はこの言葉に負けなかった。伝記が大好きでたくさん読んでいたから、つまらない憶測の評論に負けないですんだ。伝記には悲しみや苦しみ、失敗の乗り越え方が書いてあった。飛行機の勉強をたくさんし、様々な飛行機を作った。アヒルの顔をした新幹線も僕達で作った。今では、日本の宇宙航空研究開発機構の新型ロケットの開発も任されている。人工衛星も丸ごと作れる。世界に2つしかない日本に唯一の無重力状態を作り出せる実験装置も持っている。NASAやJAXAから研究者がどんどんやってくるようになった。

なぜ、僕達は宇宙開発ができたのか。ロケットを作る特殊な材料はホームセンターや通信販売で簡単に手に入る。普通に買うことができる。だから、宇宙開発はやろうと思ったら誰でもできる。ところが、できないと思い込んでしまっている。それは、宇宙開発をやったことのない人が適当なことを言って夢の諦め方を教えるからだ。宇宙は誰もが一回は憧れ、誰もが諦めさせられている世界。だから、僕は宇宙開発をすることにした。僕にとって、宇宙開発は夢でも目標でもなく、手段である。宇宙開発を使って、「どうせ無理だ」という言葉をこの世からなく

したいと思っている。子どもたちが夢をもった時、やってみたくて見つけた時、やったことのない人がどうせ無理だと言った時、そうじゃないよ、科学が発達しているから昔できなかったことでもちやんと調べて考えたらきっとできるんだよ、と言いたい。宇宙開発ができる時代になったのだからきっと何でもできる、そう思う人が増えたらいいなあと思いつつ、一生懸命宇宙開発をしている。知恵と工夫で発明をする。それができるのは特殊な大学で特殊な孝育を受けた人ではなく、やったことのないことをやりたがる人、諦めない人、工夫する人、この3つの資質で十分である。

小菅 私は動物が大好きで、子どもの頃からどんな生き物でも飼育して何とかして殖やしたいと思ってやっていた。

そして、行きついた先が動物園。絵本でしか見たことのないチンパンジーやキリンを直接飼育できる。有頂天だった。日本でいちばん北にある動物園だが、ホッキョクグマ、アムールヒョウの繁殖を日本で初めてやるなど、非常にいい仕事をしていた。ところが、その動物園を閉園すると言われた。びっくりした。僕は考えた。動物園は変わっていない。変わったのは社会。客が来なくなったのは家族揃って出かける所が動物園だけではなくなくなったからだ。では、どうすればよいか。考えた末、動物の知っていそうで知られていないことを伝えようということになった。例えば、キリンの角は何本あるか、答えは5本。ペンギンの足は短いというが、実は長い。僕達は、客が何を求めているか、自分たちにできることは何かを考えた。「夜の動物園」は、動物が寝てばかりで起きているところを見たことがない。それならば、夕方来てもらえばいいということで始まった。「冬の動物園」は、日本の最低気温マイナス41度という、もともと寒い旭川だから、冬は魅力的である。ペンギンの雪中散歩の他、雪の中ですっと立っているキリン、雪の中に出て鼻で雪玉を作って食べて、食べ飽きたらポーンと飛ばして遊ぶヒ



ヨウ。ハンディといえる冬こそ、旭山動物園らしい、世界で旭山動物園にしかないものを見せられる。冬は旭山ということで、いろいろなことにチャレンジし続けている。

いちばん大事なことは、動物園の利用者に、やっぱり動物園は必要だ、なくてはならないものだと思わせること。関心をもってもらう。その発想が「行動展示」だ。生きていくために必要な姿、行動を動物自身にやってもらう。新しい価値観である。わかりやすい感動的解説となった。入場者数がどんどん増えて、2007年度300万人となった。そのうちの250万人が有料入場者である。これは、上野動物園を圧倒的に上回る。動物本来の動きを自分の意思でやらせる。そういうことが大きな改革につながった。

柿沼 ハンディを個性に変えた一例として、会場にも展示してある線路と道路を両方走るディアル・モード・ビークル (DMV) という乗り物の開発の紹介をしたい。この乗り物は、今から約80年前から、世界の人々が挑戦しては失敗してきた。自分たちがやるにあたっては周囲から心配や反対の声があがった。



JR北海道の乗客数が一目500人以下のローカル路線は、学生50人ぐらいが朝夕乗り降りするだけで、日中の輸送はマイクロバス程度で十分という状況で、鉄道の役割を失っていた。一般的に、地方のローカル線の営業は、ワンマン列車や駅の無人化、業務の委託が多い。いずれにしても今までの経営の仕方では限界に達しており、廃線にしてバス輸送に変えるしかなかった。ところが、鉄道は100年以上地域の足として活躍し、地域の文化となっている。仮に廃止とすると、線路や鉄橋の撤去に莫大なお金がかかる。ジレンマであった。何とか残してコストの安い鉄道に変えられないか、危機感、切迫感にさいなまれていた。乗客数を増やすのではなく地域の人に利用しやすい鉄道に変革できないかと考えた。思いついたのが、「身の丈システム」の鉄道という発想の転換である。つまり、道路も走れるマイクロバスで十分という発想に至った。これが、ハンディを個性に変えるということである。その個性を創造性によって磨きをかけることでDMVができた。発想を転換し、切迫感

をこの相互の関係で点検・議論することによってハンディが個性が変わる。では、ハンディと個性はどう違うか。ハンディは他の人との違いを比較するからハンディとなる。個性は他の人とは違った特有の性質で、比較せずに多様性の中の質と考える。質というものは、自然環境の中とか地域の文化・歴史の中とか様々な失敗経験とか長い人生をかけて形成される。どうやって磨きあげるかということが創造性であって、マイクロバスを使って線路を走らせるにはどういう知恵を出せばいいか、ということでこのDMVという車を仕上げていったのである。

小菅 人は努力している時が一番生き生きしている。僕達の大義名分は、動物園を残すことではない。自分たちの活動が絶滅から動物を救い、環境を救い、地球を救うことになる。その大義が努力を続ける要因である。学校では、すぐに教えず、子どもにいろいろな可能性を考えさせ、膨らませるなど、自分で答えを見つけさせてほしい。どう思うかと聞かれて、わかりませんと答える子どもではなく、自分の考えを自由に言える子どもを育ててほしい。

柿沼 世の中の森羅万象、比べればすべてハンディになるが、すべて個性にとらえ、多様性の中で創造性に磨きをかける生き方をしてほしい。森にはいろいろな木がある、その多様性を単一化して同化するのではなく、多様性の中で同化させるということが非常に大事である。教育も同じだと思う。

植松 勉強しないといい学校、いい会社に入れないと教える大人がいるが、学校、会社に評価される人間を作るのではない。教育とは、失敗や責任の避け方を教えるものではなく、人を創るもの。学問とは社会の問題を解決するためにあるもの。これからの日本を支えるのは、やったことのないことをやりたがる人、諦めない人、工夫する人。だから、0から1を作り出す人を育てることが大事。先生方には、子どもたちに諦め方を教えないでほしい。しょうがない、どうせ無理と言うのでなく、だったらこうしてみようとか挑戦する子どもを育ててほしい。

閉会式

- | | |
|----------|---|
| 1 開式 | |
| 2 あいさつ | 向山行雄 大会会長
福田信一 大会実行委員長
鈴木弘康 次期開催県代表 |
| 3 閉会のことば | 九津見幸男 大会副会長 |

第206回 理 事 会

9月29日（水）午後1時45分開会

ホテルライフオート札幌

進行 両角庶務部長

1 開会のことば 九津見副会長

2 会長あいさつ（要旨） 向山会長

民主党の代表選挙があり、菅改造内閣が発足した。新しい高木文部科学大臣は、川端前大臣の意図を引き継ぎ就任した。文科省の概算要求もそのまま引き継がれることになるであろう。

理事会資料に基づき話をさせていただきます。

文科省は30年ぶりの定数改善の概算要求をまとめ関係機関にお願いしてきたが、これからが大変である。財務省は、財源がなく経済的にも減速している中で先生の数を増やすことに対し、厳しいスタンスである。全国に6万人の加配教員がいる。少人数加配などの教員のうち5万人をはがして、文科省の要求している5万人に配置すればお金がかからずに定数改善計画ができると財務省は考えている。今ある加配をはがされたら大変である。

今回の文科省の出した案は、「元気な日本復活プロジェクト」の事業1つである。各省庁から出されている190くらいプロジェクトの中からしぼり込むために、政策コンテストをやることになった。内閣府に多くのメールが集まれば、国民の声が強いとされ、優先して実施することになるであろう。皆さんにもぜひメールを出していただきたい。PTAとも協力し合い、政策コンテストで上位を目指したい。校長会にとっても数十年に1回の千載一遇のチャンスである。先輩たちも、長年要求してきたができなかったことである。今回の定数改善は機械的に学級を増やすのではなく、教育委員会の工夫が認められている定数改善である。ぜひ、それぞれの地区で取り組んでいただきたい。

障害者制度の改革についてであるが、統合教育を進めるという内容であり、希望する児童はすべて地元の学校に入れるべきだという案だった。全連小は、全日中と協力し、専門家の会議にかけられるべきだと意見表明をしてきた。そこで、

中教審の中に特別部会を設置することになった。

適切な就学先を決定する就学指導委員会が形骸化している地区がある。就学支援委員会という名前に変えたところもある。小学校は全国で2万校あるが、就学指導委員会にかける数は今までは2万件ほどであったが、去年は3万件もあった。相談件数が1校あたり1.5人となる。保護者との意見が分かれた場合、就学をどのように決定するのか、就学指導の仕組みを議論していくこととなる。校長会の意見も注目される。11月の会長会では、現在の進捗状況を文科省の担当課長に来てもらい、説明をしていただくと考えている。

新教育課程の準備であるが、全面実施まで残り6カ月の時期となった。残りの期間で何をしていくかを考えていただきたい。

平成23年度は、新教育課程を円滑に実施するための4つの「節目日」を設定し、教職員に指示することが大切である。何ができていて何ができていないかを検証するための日にちの設定である。

まず、始めは、4月6日である。この日は、始業式であり、平成23年度の実質的な授業の開始日である。このときに教育課程ができているか、人的な条件整備、教材整備ができたのかを確かめる。

2つ目の節目日は、7月20日である。子どもに1学期の通知表を渡す日である。新しい通知表について、保護者に十分な説明をし、納得してもらっているのかを検証する。

3つ目は、10月1日である。上巻の教科書が終わるところである。このとき初めて授業内容が増えたことを実感する教員がいるかもしれないが、このころに焦っても遅いのだ。10月1日に上巻が終われるかが大事である。

最後は3月25日。年度が終わるときに教育課程が修了できるかが最後の節目となる。

3 大内前事務局長への感謝状贈呈

4 報告

- (1) 会務・事業・活動の概要 両角庶務部長
- (2) 会計 廣田会計部長
・基金管理状況 ・負担金納入状況
- (3) 研究大会について
・北海道大会について
福田大会実行委員長
・山形大会について 鈴木山形会長
開催日：平成23年10月20日・21日
副主題：「誇りと志を胸に、ともに夢
に向かう、いのち輝く子ども
を育てる学校経営」
- (4) 要望活動について 露木対策部長
・平成23年度小学校教育の充実に関する
文教施策並びに予算に関する8つの要
望事項
・「新・公立義務教育諸学校教職員定数
改善計画（案）」の実施を求めるパブ
リックコメントへの意見表明について
（依頼）
- (5) 次期研究主題について 有馬調研部長
- (6) その他
・海外教育事情視察について（報告）
両角視察団長
・日韓教育文化交流について（報告）
高橋広報部長

5 情報交換

- (1) 新教育課程の完全実施に向けて
 - ① 土曜授業と長期休業の状況
 - ② 新教育課程にかかわる教育条件整備の
状況

調研部長 ①について、資料「東京都公立学校（抽出120校）の土曜授業への対応状況」を基に情報を提供する。東京都では、地域・家庭との連携あるいは学校公開を主とした土曜授業を月2回程度であれば行ってもよいという趣旨の通知が都教委から出され、資料の示す通り、土曜授業の動きが活発になってきた。平成22年度は約8割の学校が6日以下の実施となっている。平成23年度については、未定としている学校が3分の1だが、実施予定校については増力傾向にある。

愛媛 どのような通知内容であったのか、留意事項はあるのか、お話し願いたい。

調研部長 週5日制の趣旨の範囲の中でという断り書きが付いている。通知の背景には授業時数確保が非常に厳しいという状況があり、新学習指導要領の改訂により更に時数増となったことを受けて、都教委が授業時数確保の方策として土曜授業の実施を可能とした。留意事項として、地域・家庭が主体となった授業公開が望ましいとされている。

三重 三重では週休2日が定着している。土・日曜は、多くの子どもたちが社会教育として地域のスポーツや文化活動に参加している。そのため、月曜日に学校を休んだり、朝から疲れた顔をしていたりという実態がある。

静岡 静岡市も土曜日授業ということで学校開放をやっているが、月曜日を振替としている。労基法に照らしながら、授業時数の確保について模索している状況である。

司会 東京都以外は土曜日授業の具体的な取組みが進んでいないが、全面实施となれば授業時数確保のために様々な方法が模索される中で、必然的に土曜日授業も出てくると思われる。その時の参考としていただきたい。

会計部長 ②について、新学習指導要領の実施にあたって必要と思われるのは、資料の通り、人員の配置、施設・備品の整備、研修の充実の3点である。多くの政令指定都市は教材整備の対応をしているが、人的な対応はほとんどなされていない状況にある。

愛媛 人的措置では、新学習指導要領の対応として非常勤の講師が配置されている。週当たり20時間という制限で、週5日午前中の勤務が可能であるが、ごく一部の限られた配置で、全体的には不足の状況である。

6 連絡・その他

- (1) 広報部より 高橋広報部長
 - ① 広報部各委員会活動について
 - ② 常用漢字表改訂に伴う表記対応について
- (2) その他

7 閉会のことば

九津見副会長